

騎士「姫様って、エロ
いですよね」 姫「●
ね」

TS娘はオレの嫁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

乙女な姫様と変態騎士がワチャワチャします。

目次

騎士「姫様って、エロいですよね」 姫「●	
ね」	1

騎士「姫様つて、エロいですよね」 姫「●ね」

姫「は？ えつ、今、なんて？」

騎士「いえ、ですから姫様つてエロいですよね、と」

姫「今の発言、普通に姫への不敬罪なんですけど」

騎士「それに関しては、エロい姫様が悪いんですよ？」

姫「はあ？ アンタね、私の儂くも可憐な容姿にみとれてしまうのは人間として仕方がないにしても、それを本人の前にしてそんな表現をするのはどうかと思うわよ」

騎士「あ、いえ。別に、姫様のことそんな風に思ったことはないです。どちらかというと、自分は、おとなしくて包容力がある女性のほうが好きなので。いつも騒がしくて、包容力とか欠片も分かってなさそうな姫様はちよつと・・・」

姫「はあ!? 私のどこがうるさいっていうのよ！」

騎士「そういう所です。そーゆう」ハア

姫「それに私なんて、ほーよりりよくの塊じゃない！ そんな私をほーよりりよくがないとかアンタ、目が腐ってるんじゃないの？」ハツ

騎士「姫様、ほんとに包容力がなにかわかってらっしゃいます？」

姫「も、もちろん、それぐらい知ってるわよ」アセ

騎士「じゃあ、どんな意味か言ってみて下さいよ」

姫「えーと、確か、ほーよりよくの意味は・・・」ンー

騎士「意味は？」

姫「そう、強さのことよ！ 何よ、私ったら、やつぱりほーよりよくの塊じゃない」フン

騎士「姫様、それ包容力じゃないです。姫様が言ってるのは戦闘力です。あのですね、いいですか？ 姫様、包容力っていうのは、簡単に言っちゃえば、心の広さのことです。戦闘力とは全くの別物です。私はそれが姫様には足りないかと常々思ってるんですよ」

姫「な、何よ。ちよつぱり、冗談を言っただけじゃない。私はもちろん、それぐらい知ってたわよ」

騎士「(本当かなあ)」

姫「それにわたし、それだってちゃんと兼ね備えてるじゃない」フン

騎士「この間、弟君にショートケーキのイチゴを取られたぐらいで凄くお怒りだったのを自分、記憶しているのですが」

姫「あ、あれはオクトのヤツが私が最後に食べようと楽しみにしていたイチゴを脇から取ったんだもの。怒って当然よ、食べ物への恨みは恐ろしいんだから！」フン

騎士「仮にも姫様でしょうに……。意地汚いと言うかなんというか……」

姫「ほっときなさい！」

姫「はあ……。それで、結局最初の発言はどのような意味なワケ？」

騎士「はあ、最初の発言とは？」

姫「だ、だから、最初の発言よ、さ、い、しよ、の！」

騎士「自分、何か言いましたっけー？ 記憶にないんですが」

姫「あ、あの、あれよ、だから、その……え、え、え、え、エロいとか言ってたじゃない……」

騎士「え、なんて？」

姫「うう……。だから……。その、え、えろ……。って、アンタ、それ、私に言わせたくてやってるだけでしょ！」

騎士「あ、はい、そうです。恥ずかしがる姫様か可愛かったので、ちよつと悪戯しちやいました」

姫「か、か、か、かわつ……。！」

騎士「(さつき自分のこと可憐とか言ってた癖に、こういうこと言われるとすぐ照れちゃうんだよなあ。ほんとにご馳走様です)」

騎士「で、エロいと言った理由でしたっけ？ そんなの決まってるじゃないですか！」

「姫様がエロい、からです！」キリッ

姫「それだと説明になってないし！ その理由を説明して欲しいんだけど!？」

騎士「えー、説明、ですかー。ほんとに聞きたいですか？」

姫「な、なによ。いいから、はやく説明しなさいよ」

騎士「でも、言ったらたぶん姫様後悔しますよ？」

姫「いいから！ これは命令よ！」フン

騎士「分かりましたよ。命令だから仕方なく言うんですからね？ 言った後に攻撃とか

してくるの止めてくださいね？」

姫「ああ、もう、分かったから！ つべこべ言わず、とつとと、言いなさい！」

騎士「それでは、僭越ながら。姫様、ちようど先週の深夜頃、ご自身のお部屋で何を為されていたか、覚えていらっしやいますか？」

姫「先週の深夜？ 今からちようど一週間前ってことよね、えーと：：、って、え、は、え？・・・ま、まさか、いや、その、え」

騎士「ああ、思い出して頂けたようでも何よりでございます。それが理由です」

姫「は、ちよ、ちよつと待って？ 一つ、一つだけ聞いていい？」

騎士「はっ！ どうぞ、なんでもお聞きください」

姫「えーと、アンタ、その、・・・見たの？」

騎士「見たのと、おっしやられましても、私めではなんのことか検討がつかないのですが、一体何のことでしょうか？」

姫「だ、だから、その、先週、私がシてるとこ、見たの？」

騎士「シてる、とは？」

姫「私が、先週の深夜シてたこと、だけど・・・」

騎士「ああ、それなら、バツチリと見させて頂きました」

姫「・・・」ボウゼン

騎士「姫様？」

姫「・・・コロス」

騎士「へ？」

姫「アンタを●して、私も●ぬうううううう！」

騎士「姫様!! お気を確かに! ああ、もう、聖剣を取り出さないでください! そんなの姫様が全力で降ったらこの城ごとこあたり一帯が更地になってしまいます!」

姫「ううう! だって、だって、アンタが、アンタが、私の、アレを、見たつてええええ

!

騎士「ああ、とつても可愛らしかったですよ、姫様。目を閉じて、あんなに必死に：」

姫「やっぱり●すううう!」

騎士「落ち着いてください！」

姫「これが、落ち着けるかあああああ！」

騎士「姫様、恥ずかしがることはありません！ 姫様だって、思春期、これぐらい普通ですよ！」

姫「それをアンタに見られたのが嫌なのよおお！」

騎士「大丈夫！ 私なら気にしてませんから。（時々、あの時のことを思い出しながら、オカズにさせていただけにいるだけです）」

姫「私に気にするの！」

姫「ハア、ハア……。もう、ヤダ。私、お嫁にいけない……。ズーン

騎士「レイプ目の姫様も見てると興奮しますね（そんな、姫様はお美しいんですから、世の男性が放っておくわけじゃないじゃないですか）」ニヤリ

姫「変態だああー！」

騎士「あれ？（ああ、本音と建前が逆でしたか。うっかり、うっかり）」

姫「もう、ほんとヤダ……。こいつ雇ったの誰よ……。即刻クビに、いや、処刑したいんですケド」

騎士「お忘れですか、姫様？ 私を近衛騎士として選んでくださったのは姫様ではないですか、あの時のことを今でも私は鮮明に覚えております」シミジミ

騎士「まあ、姫様、これで分かって頂けたかと思いますが、これが私が姫様をエロいと言う理由です、納得していただけましたね？」

姫「……………●ねばいいのに」

騎士「おっと、これはなかなかあるものがありますね？」

姫「●ねばいいのに」

騎士「2回目はさすがの私も傷つきますよ？ しかも食い気味でしたね。あのですね、姫様、初めに言ったように私は姫様みたいなのはタイプじゃないです。ですので、姫様のアレを見たところで何も感じませんよ」

姫「……………さつき興奮するとか言ってなかった？」

騎士「きつと聞き間違いか何かでしょう。そんなことより、姫様の疑問はこれで解消されたでしょう？ 姫様、そろそろ休憩は終わりにして支度を致しましょう」

姫「全然休憩出来なかったどころか、どっと疲れたわ……。もう、本当に一生の恥ね」
騎士「一生……ですか。ご安心ください。このことは誰にも言いませんので。」

姫「アンタに知られてるのがほんと嫌なんだケドね、●ねばいいのに」

騎士「姫様、それ口癖になってませんか？」

騎士「まあ、そうですね、姫様。もし、誰かにバラされたりするのが、不安ならずと私を手元に置いておくのが一番いいんじゃないですかね？」

姫「・・・フン。仕方がないから置いてあげろ。バラしたら消すから」

騎士「ご安心を、姫様。この命尽きる、その時まで姫様と共に居ることを誓います」

姫「精々、こき使つてあげるわよ」

騎士「・・・あ、そういえば、なのですが、姫様」

姫「何よ」キョトン

騎士「姫様がアレを為されていた時、何かを眩かしながら行為をなされていたような気がしたのですが、よく聞き取れなかったのです、なんと言われていたのですか？」

姫「つくろ！ そのことはもう、忘れなさい！ ほら、さつさと行くわよ！」

騎士「ああ、お待ちください、姫様！」